ナヤンの乱における元朝軍の陣容

吉　野　正　史

はじめに

ナヤン・カダアンの乱は元朝政治史における最大の事件の一つであり、既に日本・中国を中心として少なくない研究成果が発表されている[1]。しかし、事件の重要性に対して、現状での私たちの認識はなお十分であるとは言えないだろう。

現在までのナヤンの乱に関する成果を振り返ると、主に元朝とオッチギンウルスとの関係から考察されたものが多いが、陳得芝氏が事件の東方三王家に与えた影響を、堀江雅明氏が乱に至るまでの政治的状況の変化を、それぞれ的確に論述している一方、元朝（大元ウルス）自身にとって、つまりクビライ家のウルスとしての元朝にとって、乱とその鎮圧は如何なる政治的意味があったのか、また乱の鎮圧過程の具体的内容については、尚十分な考察が行われていない。

また、モンゴル時代史全体に係る軍事史的視点から見ても、軍事制度については多くの重要な成果があるものの[2]、特定の時期/地域、或いは戦役などに関して軍の編成細部まで踏み込んだ考察は、杉山正明氏[3]及び松田孝一氏[4]の一連の著作のほかは、それほど多くなく、研究の蓄積は不足していると言える。

筆者はかつて、事件の政治的背景と推移について触れ、ナヤンが具体的行動を起こす以前に、元朝側は上都・遼東・黒竜江下流域に既に軍隊を展開し、ナヤンを包囲する体勢を整えていたことを明らかにした[5]。本稿では、その際十分に検討を加えることの出来なかった元朝軍の陣容を詳細に検討することにより、まずその軍編成を実証し、元朝にとって事件の持つ政治的意味を軍隊動員の側面から理解するための基礎作業を行うとともに、軍事史的角度からのケーススタディとして、動員された人物に関しても出来る限り詳細に考証を行う。

ナヤンの乱、それに続くカダアンの乱は連続した事件であるが、二つの乱の政治的・軍事的性質が異なること、並びに紙幅の都合から、本稿ではナヤンの乱のみを扱い、カダアンの乱については次稿に譲ることとする。

本稿は主として二つの部分から構成される。まずナヤンの乱にいたるまでの東北地方における元朝軍の動向を記述し、事件に対して元朝側が主導権を握っており、ナヤン側は受動的立場にあったことを説明する。続いて、ナヤンの乱において動員された人物、部隊に対し検討を加え、元朝

軍の規模と構成を明らかにしたい。

1．ナヤンの乱前夜の元朝軍の動向

至元23年に、元朝は遼陽行省（東京行省）を立てたが、過去に少なくない学者が、元朝の目的は東北地域に対する管理を強めることであり、それによりナヤンら諸王の反感を招いたことから、それがナヤンの乱の直接の契機になったと説明する[6]。但し、堀江雅明氏は、行省の設置そのものがナヤンの反意に対処するものであったとする[7]。『元史』にも、至元21年の時点で北京宣慰使亦力撒合がナヤンの「異志」を察知していた、との記載があり[8]、至元23年以前からナヤンらが元朝に対し反感を抱いていたことはほぼ確実と思われる。

一方、至元21年以降、元朝は東北・高麗地域及びその周辺において大規模な軍事行動を起こしている。まず注目すべきは、第三次日本遠征計画の発動である。第二次日本攻撃（弘安の役）の場合と異なり、この度の計画では、全ての戦闘部隊を合浦を中心とする高麗南部に集中させているが、その中で特に目を引くのが蒙古軍都萬戸闍里帖木兒（チェリテムル）の率いる軍団である。闍里帖木兒麾下には「萬戸三十五人、蒙古軍習舟師者二千人、探馬赤萬人、習水戰者五百人」[9]とされる蒙古騎兵１万を中心とする大規模な兵員が配置された。また彼らは対南宋戦を経験した精鋭部隊だった可能性が高い。闍里帖木兒率いる部隊は馬の生育に適しているといわれる耽羅に駐屯していたが[10]、恐らく水師を備えたこの部隊は、水陸共に高い機動性を備えていたと思われ、実際に乱の発生に際して元朝は速やかにこの部隊を北上させ、クビライの主力軍に合流させている[11]。

また戦闘部隊を高麗に動員すると共に、至元22年に阿八赤と洪茶丘に命じそれぞれ、江南及び東北の軍糧の状況を確認させ、合浦に江南米百萬石を海路輸送し、東京（遼陽）と王京にそれぞれ十萬石の米を備蓄させている[12]。日本遠征計画そのものは中止されたが、準備自体は実際に行われたため、結果的には、高い戦闘力を備えた部隊が新たに耽羅に配備され、また東北・高麗それぞれに糧食が備えられ、それらが乱鎮圧に当たっても使用されることなる。

一方、至元21年、クビライは征東招討司に命じて骨嵬（クイ）攻撃のためサハリンに侵攻を行った[13]。翌22年から23年にわたり、更に征東招討使塔塔兒帯、征東宣慰使都元帥楊兀魯帯らが、兵１万、軍船１千艘を以って骨嵬に攻撃を仕掛けている[14]。そしてその後方支援として骨嵬攻撃が決定された21年、阿八赤を征東招討使とし[15]、翌年征東宣慰使都元帥に転任している。同年に阿八赤は江淮行省に転任したが[16]（その後征東宣慰使に復帰したかは不明）、その子寄僧が水達達屯田總管府達魯花赤となり[17]、一部の部隊を更に北上させ、黒竜江下流域東北部に駐屯させている[18]。大葉昇一氏は、サハリン出兵の目的は日本遠征の為の足場固めとして行われたとの解釈をとるが[19]、当時の元朝を取り巻く政治状況を考えれば、恐らくはナヤンそして更に視点を広げればカイドゥに対する備えとして、長年元朝に敵対してきた骨嵬に対して打撃を与えることが目的

だったのではないだろうか。仮に骨嵬がナヤン側につけば、水達達地區の元朝軍は挟撃されることなり、ナヤン側にとって後方の憂いを無くすことが可能となるため、骨嵬の戦力を削ぐ事は元朝にとって必要な戦略であったはずである[20]。

また、至元23年、右丞相安童らの建議に従い、漢地において大規模な馬の徴収を行っている[21]。このときの徴収量は合計10万2千頭であり、上都に8万頭、大都に2万2千頭が配置された。永平路の有力者であった阿台も500頭を徴収されていることから、数を揃えるだけでなく、質的にも軍用に耐えるものが少なくなかったのではないかと推測される。この措置の直接の目的は恐らく同年のカイドゥ軍の侵入に対する備えであると考えられるが、同時にオッチギン家の動向へも配慮したものと考えてもおかしくはないだろう。

漠北方面へ目を向ければ、至元21年、皇子那木罕（ノムガン）を北安王に封じ、カラコルムに出鎮させている[22]。その麾下には皇子闊闊出（ココチュ）、丞相朶魯朶海、樞密副使土土哈らが含まれる。23年には、更に皇孫甘麻剌（カマラ）が追加派遣されている。

上記の状況から見れば、至元23年以前に、元朝は既に上都の主力軍、水達達地域の征東宣慰司軍、遼東・遼西地区の遼東宣慰司・北京宣慰司、高麗の蒙古軍都萬戸府軍、漠北の北安王軍などの配置を完了しており、ナヤンらの勢力は挙兵以前に元朝軍に包囲されていたことがわかる。元朝側による政治的・軍事的圧力は、オッチギン家に大きな政治的判断（引き続きクビライの宗主権を認めるか、或いはカイドゥとの連合を図るか）を迫るのには十分だったのではなかったのかと思われる。つまり、至元23年の行省設置がナヤン挙兵の直接契機になったとしても、元朝側としてはそれは織り込み済みであったのではないか。ナヤンとカイドゥとの連携を断絶した上で、ナヤンによる軍事行動が誘発されることも視野に入れた上での行省設置であったと思われる。

2．ナヤンの乱平定戦における元朝軍の編成

至元24年4月、ナヤンらの挙兵に対して、元朝は上都の主力軍をはじめ、既に配置を終えていた遼東、水達達、漠北などの軍を出動させた。本節では、ナヤンの乱平定戦に参加した人物を、各方面の軍ごとに、出来うる限り編成別にグループ化し、それぞれの部隊に与えられた役割、そして全体の特徴を明らかにしたい。尚、本節の考証をもとに製作したものが、稿末の表である。以下における人名前の数字は表と対照する際の便宜を図る為に加えたものである。

(1) 主力軍

・クビライ・ケシク

ケシクは日常カーンの身辺護衛を行ったが[23]、元朝期においてはケシクのみで編成された部隊が出兵することは少なかった[24]。しかしながら、クビライが親征するに当たり、ケシクもそれに付き従い戦場赴いたと考えるのが自然であろう。『東方見聞録』にある「カーンが招集したこの三十六万騎は単に彼に仕えるタカ使いと側近の軍士からなっていた」[25] との記載は、真実を伝え

るものではないにしろ、ある程度の事実を反映しているものと考えられる。管見の限り漢文文献にはケシクがグループとして参戦したとの記述は見られないが、他に官職を持たないケシクは（つまり有官怯薛でないもの[26]）は、クビライの身辺を守備していたと推測される。史料上からその条件に該当するものは、2.脱脱（トクトア）、3.昂阿禿、4.賀勝、5.王伯勝、6.阿沙不花である。そのうち、賀勝については

二十四年、乃顔叛、率其兵入寇、上親將討之。將戰之夕、唯近臣只兒哈良帶劍立寢門外、雖親王貴人不得輒至、而公直帳中受密旨、出入指授諸將[27]。

との記載があり、昂阿禿[28]、王伯勝[29]についてもケシクとしての参加であることがほぼ確定されるため、クビライの身辺にいたことは間違いないだろう。脱脱については、有官怯薛ではなかったがジャライル国王家出身のため後述の五投下軍に所属した可能性も否定できないが、脱脱の活躍をクビライが目にしたとの記載があることから[30]、先鋒を担った五投下軍に属していなかったことがわかる。そうであれば、他のケシクとともにクビライの警護に当たっていたと考えるのが妥当ではないだろうか。

阿沙不花については、上述の4人とは異なり、「以千戸帥昔寶赤之衆從行」と恐らくは数百人の部隊を率いていたことが窺われる[31]。昔寶赤とはケシクの内、所謂鷹匠の役目を担うものであり、カーン側近のもの（近侍怯薛歹昔寶赤）と、それより下級な地方に分散されたものがあった[32]。阿沙不花が率いた昔寶赤がカーン側近のものであれば、ケシクの一隊としての参戦だったと考えられるが、下級昔寶赤を単に兵士として動員したものであれば、他の部隊に編成された可能性もあることを考慮しなければならないだろう。

7.塔海については、列伝に「至元二十四年，扈駕征乃顔。」とあるが、その前後に「世祖時，從土土哈充哈剌赤。」「二十六年，入覲，帝命充寶兒赤，扈駕至和林，賜只孫冠服。」という記事があるため、クビライ、皇孫テムル、土土哈の何れかに直属したのかは現状では判断が難しい。

・皇孫テムル及び側近

『元史・成宗本紀』によれば、「二十四年、諸王乃顔反、世祖自將討平之。其後合丹復叛、命帝往征之、合丹敗亡。[33]」とあり、後の成宗、8.皇孫テムルがナヤンの乱平定戦に参加したか否かは明確には記されていない。但し、『元史・忽林失列伝』には、「後以千戸從征乃顔、馳馬奮戈、衝擊敵營、矢下如雨、身被三十三創。成宗親督左右出其鏃、命醫療之、以其功聞。[34]」とあり、テムル自身が戦場にいなければありえない状況が記されている。またテムルが平定戦に参加したことを示唆する記録は幾つか残されている。

「道家奴公墓誌銘」には「公從屬車、冒矢石而前、抵黑龍江、戰數有功。未幾、復扈駕親征海都、凱旋已久、而賞典未行[35]。」とあるが、クビライは、ナヤンを捕縛の後、上都に帰還しており黒龍江には至っていない。カイドゥを「親征」したとあることからも、成宗として即位後に当時皇太子であったテムルに対して皇帝に属する述語を冠した文章であり、つまり「屬車」「扈駕」

の表現は当時皇太子であったテムルを示すものであろう。『元史・洪萬列伝』にも同様の表現があることから[36]、クビライ帰還後はテムルが皇帝代理として全軍の指揮を取ったのではないだろうか。つまり、『元史・成宗本紀』の記事は、ナヤンの乱においてはクビライが親征したということを強調したものであり、テムル自身が参戦したことを否定するものではないと解釈すべきだろう。

では、テムル麾下にはどのような人物が配置されたのであろうか。まず詹事丞である**9**.王慶端が想定される。程鉅夫による「冀國王忠穆公墓碑」には、「東征納延、特敕公以所部扈從。公時年六十餘矣、在軍中與士卒同甘苦、晝則擐甲執兵、身與敵遘、夜則引車環列、臥不解衣。[37]」とあり、所属は不明だが、その後に続く「東寇既平、大駕北巡、命公以其軍先歸。」とある中の「大駕」とはやはりテムルを示すと思われ、テムル麾下にあったことが窺われる[38]。その他には、参加者のうち、所属不明且つ裕宗チンキムのケシクであった人物として**10**.月魯哥[39]、**11**.買住[40]の二人が挙げられるが、彼らは引き続きテムルのケシクとしてその指揮下にあったと考えてもいいのではないだろうか。またテムルが「親督左右出其鏃」したという**12**.忽林失も同様であったとも考えられる。

・枢密院諸臣

枢密院の高官も当時枢密院内で最高位[41]にあった**13**.伯顔（バヤン）を筆頭にクビライに扈従した。バヤンの伝記史料である元明善の〈丞相淮安忠武王碑〉に「佐上親征、奏李庭、董士選帥漢軍、得以漢法戰。金剛奴、塔不帶進逼乘輿、漢軍力戰、賊不能陣而走。及禽乃顔、王之謀畫居多。[42]」とあり、また同僉樞密院事を務めていた**14**.洪君祥の列伝に「二十四年、乃顔叛、從世祖親征。每駐蹕、君祥輒以兵車外環為營衛、布置嚴密、帝嘉之。凱還、加輔國上將軍。類次車駕起居、為東征録。[43]」とあることから、平定戦における彼らの役割はクビライを補佐し、建策を行うと共に、恐らくはケシクらと共同して、その身辺の防衛に当たっていたと考えられる。

上述の二人の他、史料上で確認できる人物としては、前衛史（前衛侍衛親軍の令史か）である**16**.郭明德があげられる。興味深いことは、郭明德は枢密院の大臣（恐らくはバヤンか）幕下の文官でありながら、武器を取り敵を防いだことによる功績が挙げられており、クビライの本営もナヤン側の攻撃に晒されていたこと知らしめる史料の一つとなっている[44]。また**15**.暗伯という人物も恐らくはバヤンらと行動を共にしていたと考えられる[45]。

・中央官員、幕僚など

所謂文官職にあり尚且つモンゴル的な世襲地位による武力を持たなかった人物についても、クビライの本営にあってその補佐を行ったと考えられる。大司農の**20**.鐵哥[46]、典瑞少監の**22**.焦養直[47]、司天台提點の**23**.岳鉉[48]、尚書左丞の**26**.葉李[49]については、クビライの本営にあったことが史料上で確定される。また明確な職名は不明だが「掌司天事」とされる**24**.靳德進は岳鉉の下にあったと考えるべきだろう[50]。太官直の**19**.曷剌[51]についても、官職と個人的背景から、部隊

を率いたとは考えにくい。

但し、**17**.洪俊奇、**18**.碩德、**21**.明禮帖木兒、**25**.移剌元臣については、上述の人物とは異なった事情がある。洪俊奇（洪茶丘）は同僉樞密院事洪君祥の兄であり、洪氏の世襲職である高麗軍民總管を務めていたが、同職は至元18年に子の洪万に譲り、当時は前征東行省右丞の地位にあった。万の列伝にはその統属関係が明記されている一方[52]、俊奇の伝には「二十四年、乃顏叛、車駕親征、賜以翎根甲、寶刀、命率高麗、女直、漢軍扈從。」とある。万の伝からは俊奇と行動を共にしたことは窺われないことから、父子は当時の編成上では別系統にあったと思われる。俊奇の部隊の所属は明らかではないが、クビライ主力軍に属していたことは間違いなく、また玉昔帖木兒麾下ではないことから、恐らくはクビライ本営であったと思われる。同知通政院事碩德[53]、翰林學士承旨の明禮帖木兒[54]に関しては、官職的には他の中央官員と同じく本営にあったことが推測されるが、前者はジャライル国王家の出身、後者は察哈札剌兒氏忙哥撒兒の孫であり、一部隊を率いて玉昔帖木兒の蒙古軍主力軍などに属していた可能性も否定できない。移剌元臣は当時官職にはなかったものの、乱に際してクビライの本営に馳せ参じ、前線に赴くことを願い出ている[55]。本営あるいは玉昔帖木兒の軍に配属されたと考えられるが、前者の可能性のほうがより蓋然性があるように思われる。

・コンギラト投下軍

27.帖木兒（テムル）はクビライ在位期において外戚として大きな権力を握ったコンギラト部の当主であり、尚書省平章政事を務めていたが、コンギラト首領として一軍を率いて参戦した[56]。胡祖廣の〈相哥八剌魯王元勳世德碑〉によれば、「世宗皇帝親御六軍、躬行天討、甫至虜境、為伏兵掩襲、帖木兒帥麾下精兵犯圍突戰、殺傷甚衆、虜亦遁去。[57]」とあり、平定戦初期にはクビライ本営と行動を共にしていたことがわかる。ナヤン捕縛後には玉昔帖木兒らと共同でナヤンに与した諸王の掃蕩に当たっている[58]。

コンギラト部から弘吉剌部千戸で按陳那顏の裔孫である**28**.脫憐[59]、特薛禪の裔孫である**29**. 不只兒[60]も帖木兒に従っていることから、帖木兒麾下の部隊はコンギラト部族により構成されていたことが知られる。

コンギラト出身ではあるが、特薛禪の一族でない**30**.孛蘭奚については、「兵始交、孛蘭奚躍馬陷陣、斬其旗、所嚮披靡、世祖遙望見壯之。有頃、乃顏兵遁走、孛蘭奚馳歸以捷聞。[61]」とあり、クビライ本営と行動を共にしていたと思われるが、その所属は不明である[62]。

・上都駐留諸軍

乱発生当時、クビライが上都に滞在していたことからか、上都留守である**31**.賀仁傑も平定戦に参加している[63]。渡辺健哉氏によれば、大都留守司の職掌は大都城内警備、大都路内での物資調達、カーンの日用品の管理などであるが[64]、『元史・百官志』の「品秩職掌如大都留守司」[65]を信ずるならば、上都留守の任務も類似したものであると推測できる。そこから考えれば、戦場

においても賀仁傑の役割も、本営の守備並びに軍糧・物資の管理ではなかったかと考えられる。

同じく上都に駐屯していた部隊としては、迭只斡耳朶千戸である33.撒里蠻とその兄千家奴が挙げられる[66]。迭只斡耳朶の内容は不明であるが、上都に置かれたオルドであり、宣徽院と関係していると思われる。賀仁傑と撒里蠻らは共に平時は上都附近にあったと考えられるが、両者が乱に際してどのような関係にあったのかは残念ながら明らかではない。

・蒙古軍主力

博爾朮の後裔であり、ケシク長・御史大夫である34.玉昔帖木兒（ユステムル）率いる一軍は、平定戦において五投下軍と共に最も有力な部隊であり、蒙古・アスの騎兵部隊を中心とした主力部隊であった[67]。その麾下には、主に侍衛親軍並び高麗方面から派遣された部隊が配置されている。

侍衛親軍は、クビライにより元朝を支える新たな軍事力として、主に漢人部隊を基幹として成立された[68]。しかし、平定戦に動員された侍衛親軍部隊に関して史料で確認される５人の人物のうち、前衛親軍都指揮使の35.玉哇失[69]、その配下である36.的迷的兒[70]、後衛親軍副都指揮使の38.拔都兒（バァトル）[71]がアス、僉左衛親軍都指揮使司事の39.伯帖木兒[72]はキプチャクであり、漢人は前衛侍衛親軍千戸の37.皇餘澤[73]のみである。その背景としては、至元23年にアス部隊が前後衛侍衛新軍に編入されていたことと[74]、侍衛軍の出征に当たっては、各衛が一つの単位として独立して動員されるのではなく、各衛から兵員を抽出し新たな部隊を編成する場合が多いことから[75]、ナヤンの乱に対しても騎兵中心の部隊を選抜し、玉昔帖木兒麾下に所属させたことが考えられる。

蒙古都萬戸府萬戸である42.闍里帖木兒の部隊は、上述のように第三次日本遠征の為、耽羅に駐屯していた。ナヤンの挙兵に先立ち、遅くとも至元24年２月には東北地域に移動を完了している[76]。闍里帖木兒麾下には、蒙古都萬戸府の騎兵の他、遼陽並びに瀋陽を根拠地とする洪氏・王氏の当主として、高麗軍民總管である43.洪萬[77]、並びに高麗軍民總管兼東征左副都元帥の兀愛[78]が属していた。40.鄭制宜については、太原、平陽萬戸を父である鄭鼎より継承しており、その兵力をもって、玉昔帖木兒麾下に配属されたと考えられる[79]。

・五投下軍

所謂五投下とは、ジャライル・コンギラト・イキレス・ウルウト・マングトの五部族の諸千戸からなる集団であり、軍事・政治的行動に際して一単位として他の千戸に見られない高い凝集性を持っている。『集史』によれば左翼の千戸42のうち、五投下が３分の１強である16を占めるという[80]。姚燧の〈平章政事蒙古公神道碑〉によれば、博魯歡の言葉としてチンギス・カンによる分封の際、20のうち、東道諸王は９を、五投下は11を得たと記す[81]。

本来はジャライル国王家が、五投下の中で中心的地位を占めていたが、当時は、林衍の乱前後の東北地方の政治的状況の変化を契機として、マングト部の45.博魯歡が五投下を統べるようになっていた[82]。五投下の中で、帖木兒が一軍を率いていたため、コンギラト部の部隊は博魯歡麾

下には所属しなかった可能性があるが、イキレス・ウルウトについては、当主である46.月列台[83]並びに47.脱歡（ドゴン）[84] の乱平定戦への参与が確認されるため、恐らく博魯歡と共に行動したと考えられる[85]。また、脱歡の弟慶童も兄と行動を共にしている。

・漢人諸衛軍

侍衛親軍のうち漢人により構成される部隊は司農卿である49.李庭により指揮された[86]。関連史料が少ないため、その構成・規模は不明な点が多いが、翌年カダアン平定戦に当たって李庭に五千名の漢人部隊を任せているため[87]、少なくともそれ以上であることが考えられる。李庭がアス部隊を準備し敵陣に進撃したという記載があることから、純粋に漢人だけではなく、騎兵部隊も含まれていた可能性もある[88]。『元史・李庭列傳』[89] 並びに李庭と共に漢人部隊の指揮に当たった董士選の伝記史料の内容から見て[90]、ナヤン側が攻勢を保っている間はクビライ本営の守備に当たりつつ、掃蕩戦に入った後は玉昔帖木兒と共にその任務を遂行している。

・別働部隊及び所属不明

以上の部隊とは別に、恐らくは主力軍に属しながら（或いは同じ方面に展開しながら）別行動をとったと考えられるのが、中書省平章政事51.薛闍干（セチェゲン）率いる部隊である[91]。薛闍干の部隊は、クビライ本隊より更に北方、カチウンウルスの領地と思われる那兀河（猱河）附近まで進撃しているが、この方面に最も近い軍団は皇子愛牙赤と塔出を中核とした開元路に展開していた部隊であり、それらは乱初期に遼西に敗退しており、相互の統属関係も認められない。クビライらと共に上都を発った後、本隊とは独立してナヤン側支配地域に侵攻したと考えるのがよいのではないか。薛闍干の部隊に所属していたことが確認されるのは、イキレス部の52.忽憐である。

また、諸王である53.和元魯もアス部隊を指揮する54.失剌拔都兒（シラバァトル）を率いて参戦していたが、彼らの所属は全く不明である[92]。

(2) 遼東・遼西方面軍

この方面においては、クビライの第六子55.愛牙赤と遼東宣慰使でジャライル部の58.塔出（ターチュ）を中心とした軍団が基幹となり開元に展開したが、現地の女真族らの反乱とジョチ・カサル家の勢都兒らの攻勢により一旦は敗退している[93]。この軍団は、中央より派遣された愛牙赤とその麾下である監司の56.脱脱台、僉院の57.漢爪によるもの、塔出と同じく遼東宣慰使であるジャライル国王家の59.阿老瓦丁（アラーウッディーン）[94] らによるもの、北京宣慰使である60.亦力撒合[95]、北京宣慰司都事の61.王德亮[96]らのもの、以上三部隊により構成されていたと考えられる。そのうち、1万の軍を預けられた塔出らが愛牙赤とともに戦闘の中心となり、亦力撒合らは主に後方支援に当たっていた。

(3) 永平路駐屯軍

永平路（平灤路）は、遼西大寧と大都を結ぶ交通線上に位置するとともに[97]、オッチギン家の

分地が置かれ[98]、オッチギン家と関係の深い塔本の一族がダルガチを世襲し大きな勢力を持っていた[99]ことから、戦略的重要性を有していた。その為、クビライは乱に際して、尚書右丞、商議樞密院事の**62**.范文虎に500の兵を与え[100]、欽察衛親軍都指揮使の**63**.也速帯兒[101]、僉左衛親軍都指揮使の**64**.王通を副官としてここに駐留させた。永平路に配置された三人の階級の高さと、配備された部隊の少なさが表すように、実戦での運用ではなく、監軍的な役目を帯びた部隊と言えるだろう。

(4) 水達達路方面軍

東北地方の中でも東北部分に位置する水達達路に置かれた軍団は、元朝から見て東方三王家の背後、つまりその東側を押さえていた。現存史料で知りうる限りでは、この方面の指揮を取っていたのは、征東宣慰使都元帥であった父の阿八赤に代わり、水達達屯田總管府ダルガチとなっていた**65**.寄僧である[102]。至元22年にこの方面に配置され阿八赤に従っていた千戸の**66**.岳某、百戸の**67**.張成らも[103]、恐らくは寄僧の指揮下にあった[104]。これらの部隊は（恐らくは現地に展開していた部隊の一部）、乱の発生後、ナヤン側と戦闘を行いつつ南下し、元朝と高麗の境界にある双城まで至っている。[105]

(5) カラコルム方面軍

至元21年より皇子ノムガンらを中心とする軍団がカラコルムに駐留していたが、この方面でも諸王也不干がナヤンに呼応し、元朝に反旗を翻した。「樞密句容武毅王碑」によれば、樞密院副使兼欽察親軍衛都指揮使の**68**.土土哈は、クビライの指示を仰ぐことなく、カラコルム東方の禿剌河（トーラ河）を渡り、也不干の軍を殲滅したのち、東行してナヤン側の軍を撃破し、馬の群れを奪取し、クビライのもとへと至っている[106]。土土哈の麾下には、揭只揭烈温千戸所ダルガチの**69**.答答呵兒[107]、欽察衛百戸の**70**.乞台[108]などがいる。この方面からは、ノムガンらの中核部隊はカイドゥへの備えとして動かすことが出来なかったため、土土哈の率いていたキプチャクを中核とする部隊を中心として、ナヤン平定戦に参戦させたと考えられる。

おわりに

以上の論述からいくつかのことが明らかになる。まず主力軍を構成する部隊に関して、当時元朝所属蒙古軍は漢地の山東河北蒙古軍都万戸府・河南淮北蒙古軍都万戸府、チベットの脱思麻探馬赤軍四万戸府、カラコルムの宣慰司都元帥府が中心的なものであったが、[109] それらは乱の平定に当たって派遣されていない。但しそれは、『東方見聞録』に書かれるように「カーンには十二軍団があって軍用ははなはだ盛んであるが、それらはいずれも各方面で諸国平定に従事するために京師を離れて出軍しており、所定の期日にはとうてい召集しえられなかったから」[110] ではなく、すでに十分な兵力を東北周辺に展開していたからであろう。平定に当たって動員された兵力のうち相当数は、イェケ・モンゴル・ウルス時代に淵源を持つ投下軍であり、東道諸王麾下の

騎兵に匹敵する戦闘力を有していたはずである。加えて、ナヤン側にも少なくともオッチギン家・ジョチカサル家に元朝と通じた造反者がおり、決して一枚岩ではなかった。元朝側・ナヤン側双方の戦略的観点から、戦役が短期決戦になることは明白であり(111)、事前にナヤンの包囲網を構築していたクビライとしても準備した兵力で勝算があったからこそ、既存の戦力で作戦を遂行したのではないだろうか。

次に、戦役に参加した各部隊の役割に関しては、クビライ・ケシク、皇孫テムル側近、枢密院諸臣、中央官員並びに幕僚など、上都駐留諸軍などがクビライの本営を構成し、補佐並びにカーンの護衛を担当していた。続いてコンギラト投下軍、漢人諸衛軍は、本営と行動を共にしつつ、前面に防衛線を構築していたが、ナヤン側の攻勢を受け止めた後は、掃蕩作戦に参加している。ユステムル麾下の蒙古軍主力、五投下軍などは、先鋒としてナヤン軍に対する攻撃を担当しており、五投下軍が最先鋒となった。

続いて、中央官衙及びそれに比する機構からの参加人物を見てみたい。尚書省からは、平章の帖木兒、右丞の范文虎、左丞の葉李、中書省からは平章の薛闍干、枢密院からは同知の伯顔、副使の土土哈、同僉の洪君祥、御史台・行台からはそれぞれ御史大夫の玉昔帖木兒、博魯歡が参加している。つまり、右左丞相を除いて、四つの主要官衙のトップが参加していることになる。この他にも東宮関係からは皇孫テムル、詹事丞の王慶端らが参加しており、他にも同知通政院事の碩德らの中央の高級官員、上都留守の賀仁傑らがクビライに従っていることから、元朝の朝廷そのものが規模を縮小しつつ移動してきたとも言えるだろう。このことは、元朝の各種機構の高級官員の多くがモンゴル＝軍事的色彩を多分に帯びていることと同時に、この時期の元朝も、イェケ・モンゴル・ウルス時代の遊牧国家的性質を、本質的には尚維持していたと考えることができる。また一方、史料上からは元朝に属する小中規模ウルスの諸王の参加があまり見られないことが目を引く。主戦場が東北地域であり、またカイドゥへの備えから、他地域を根拠とする諸王の軍を動員することが難しかったことが考えられるが、山西のオゴデイ系諸王などは参加も比較的容易であったことを考えれば、クビライ家のウルスとしての元朝と東方三王家を束ねるオッチギン家―タガチャルの影―との対決という構図がより濃厚に映し出されるのではないだろうか。

最後に、元朝軍の総指揮権に関して、至元24年6月、元朝軍によるナヤン本営の撃破、並びにナヤンの捕縛の後、クビライは本営を構成する部隊と共に上都に帰還したが、その後皇孫テムルが全軍の指揮をとったと考えられる。従来、ナヤンの乱平定に当たってはクビライの親征に目が向けられることが多かったが、平定戦の後半にはテムルが指揮をとり、それがカダアン平定戦でのテムルによる全平定軍の統帥、更に長期的視野に立てば次期カーンとしての権威の向上にも寄与していると考えられることにも注目すべきだろう。

本稿では、ナヤンの乱平定戦における元朝軍の編成を史料的制限のもとにおいて可能な限り明らかにした。またそれにより幾つかの軍事的・政治的問題に光を当てることが出来た。今後は、

カダアンの乱について、同様の分析を行うとともに、両者の比較を通して、元朝にとっての乱の政治的意味を考察していくこととする。

注

(1) 姚大力「乃顔之乱考」(『元史及北方民族史研究集刊』7、1983)、堀江雅明「テムゲ・オッチギンとその子孫」(『東洋史苑』24/25、1985)、陳得芝「元嶺北行省建置考(中)」(『元史及北方民族史研究集刊』11、1987、後『蒙元史研究叢稿』北京、人民出版社、2005所収)、葉新民「斡赤斤家族與蒙元汗廷的関係」(『内蒙古大学学報』1988-2)、堀江雅明「ナヤンの反乱(上)」(『東洋史苑』34/35、1990)、叢佩遠「元初乃顔、哈丹之亂」(『社会科学戦線』、1993-3)、畢奥南「乃顔－哈丹事件與元麗関係」(『内蒙古社會科学』1997-3)など。

(2) 代表的なものとしてはHsiao, Ch'i-ch'ing, *The military establishment of the Yuan dynasty.* (Cambridge, Mass.: Council on East Asian Studies, Harvard University: distributed by Harvard University Press, 1978)、大葉昇一「モンゴル帝国＝元朝の軍隊組織—特に指揮系統と編成方式について—」(『史学雑誌』95-7、1986)、史衛民『元代軍事史』(軍事科学出版社、1998)など。

(3) 杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』(京都大学学術出版会、2004)。

(4) 松田孝一「カイシャンの西北モンゴリア出鎮」(『東方学』64 、1982)、同「モンゴル帝国東部国境の探馬赤軍団」(『内陸アジア史研究』7/8、1992)、同「紅巾の乱初期陝西元朝軍の全容」(『東洋学報』75-1•2、1993)。

(5) 筆者修士論文『元代東北政治—以権力関係為中心—』(清華大学歴史研究所、2008)。

(6) 例えば叢佩遠「元初乃顔、哈丹之亂」(『社会科学戦線』、1993-3)。

(7) 堀江雅明「ナヤンの反乱(上)」(『東洋史苑』34/35、1990)76-81頁。

(8) 『元史』(中華書局点校本、以下同じ)巻120「亦力撒合列伝」2958頁「(至元)二十一年、改北京宣慰使。諸王乃顔鎮遼東、亦力撒合察其有異志、必反、密請備之。」

(9) 『元史』巻12「世祖本紀九」250頁。

(10) 『高麗史』巻29「忠烈王世家二」。

(11) 『元史』巻154「洪福源列伝附洪万列伝」3633頁。

(12) 『元史』巻13「世祖本紀十」281頁。

(13) 『元史』巻13「世祖本紀十」269頁。

(14) 『元史』巻13「世祖本紀十」280頁。同巻14「世祖本紀十一」292頁。

(15) 『元史』巻129「來阿八赤列伝」3142頁。

(16) 『元史』巻13「世祖本紀十」281頁。

(17) 『元史』巻151「來阿八赤列伝」3143頁。

(18) 張克敬「皇元故敦武校尉管軍上百戸張君墓碑銘」(『滿洲金石志』巻5)

(19) 大葉昇一「クイ(骨嵬、蝦夷)・ギレミ(吉里迷)の抗争とオホーツク文化の終焉—元朝の樺太出兵と水達達経営に関わって—」(『学苑』701、1998)129-130頁。

(20) 元朝と骨嵬の関係については上述大葉昇一氏の論文に詳述されている。

(21) 『元史』巻14「世祖本紀十一」290頁。『大元馬政記』13B-14A葉。

(22) 陳得芝「元嶺北行省建置考(中)」(同氏、『蒙元史研究叢稿』)159-160頁。

(23) 箭内亘「元朝怯薛考」(同氏『蒙古史研究』刀江書院、1965)253頁。

(24) 蕭啓慶「元代的宿衛制度」(同氏『元代史新探』新文豊出版社、1983)72頁。

(25) 愛宕松男訳注『東方見聞録1』(平凡社、1970)180頁。

(26) 「有官怯薛」については、片山共夫「怯薛と元朝官僚制」(『史学雑誌』89-12、1980)5-8頁を参照。

(27) 虞集「賀忠貞公墓誌銘」(『道園類稿』巻46)。

(28) 『元史』巻123「也蒲甘卜列伝」3028頁「二十一年、攜其子昂阿禿入見. 世祖命昂阿禿充速古兒赤。二十四

年、隨駕征乃顏有功、奉旨代其父職。」

(29) 『元史』巻169「王伯勝列伝」3981頁「兄伯順、給事内廷、為世祖所親幸、因以伯勝入見、命使宿衛。(中略)至元二十五年、從征乃顏、以功授朝列大夫、拱衛直都指揮使。」

(30) 『元史』巻119「木華黎列伝附脱脱列伝」2944頁「至元二十四年、從征乃顏。帝駐驊於山巔、旌旗蔽野。鼓未作、候者報有隙可乘、脱脱即擐甲率家奴數十人疾馳擊之。皆披靡不敢前。帝望見之、大加嗟賞、遣使者勞之、且召還曰:「卿勿輕進、此寇易擒也。」視其刀已折、馬已中箭矣。帝顧謂近臣曰:「撒蠻不幸早死、脱脱幼、朕撫而教之、常恐其不立、今能如此、撒蠻可謂有子矣。」遂親解佩刀及所乘馬賜之。由是深加器重、得預聞機密之事。」

(31) 『元史』巻136「阿沙不花列伝」3297頁。

(32) 片山共夫「元朝の昔寶赤について―怯薛の二重構造を中心として―」(『九州大学東洋史論集』第10号、1982)。

(33) 『元史』巻18「成宗本紀一」381頁。

(34) 『元史』巻135「忽林失列伝」3283頁。

(35) 黄溍「真定路總管府達魯花赤致仕道家奴公墓誌銘」(『金華黄先生文集』巻37)。

(36) 『元史』巻154「洪福源列伝附洪萬列伝」3633頁「是月、至乃顏之地、奉旨留蒙古、女直、漢軍鎮哈剌河。復選精騎扈駕、至失剌斡耳朶、從御史大夫玉速帖木兒討乃顏。」

(37) 程鉅夫「冀國王忠穆公墓碑」(『雪樓集』巻17)。

(38) 『元史・王慶端列伝』にも「成宗即位、論翼戴功、拜金吾衛上將軍、中書右丞、行徽政副使、兼隆福宮左都威衛使、進階資德大夫。大德二年、加榮祿大夫、平章政事、僉書樞密院事、兼使如故。」とあることから、単に詹事丞であった為だけでなく、成宗との個人的繋がりが深かったことが窺われる。『元史』巻151「王善列伝附王慶端列伝」3574頁。

(39) 虞集「高昌王神道碑」(『道園類稿』巻41)。

(40) 柳貫「買住謚文簡」(『柳待制文集』巻8)。

(41) 至元二十三年時の官制では「樞密院、除樞密院使外、同知樞密院事一員、樞密院副使、僉樞密院事並二員、樞密院判一員。」となっており、樞密院使は皇太子が務めることから、同知樞密院事であるバヤンが枢密院の長官となっていた。『元史』巻14「世祖本紀」291頁。

(42) 元明善「丞相淮安忠武王碑」(『清河集』巻3)。

(43) 『元史』巻154「洪福源列伝附洪君祥列伝」3632頁。

(44) 蘇天爵「同僉樞密院事郭敬簡侯神道碑銘」(『滋溪文稿』巻11)「諸王乃顏叛東土、帝親征之、樞密大臣扈行、公被選分掌幕府文書、間亦執兵禦敵有勞、獲賜鞍馬。」

(45) 『元史・暗伯列伝』によれば暗伯は長期にわたり(恐らくはチャガタイウルスの)アルグに拘留されていたが、元朝側に救出された後に、「不花帖木兒遂承制命暗伯權充樞密院客省使。俄有旨護送暗伯妻子來京師。未幾、宗王乃顏叛、世祖親征、暗伯在行間、屢捷、命為克流速不魯合不周兀等處萬戸。(中略)世祖嘉其功、命長唐兀衛、兼僉樞密院事。歴同僉、副樞、同知、至知樞密院事、以疾終于位。」と枢密院の官職を歴任しており、乱発生当時は、「暗伯在行間」と平定戦に参加していたことのみしか記されていないが、枢密院グループと行動を共にしていたと考えるのが自然ではないだろうか。『元史』巻133「暗伯列伝」3237頁。

(46) 『元史』巻125「鐵哥列伝」3076-3077頁。

(47) 虞集「焦文靖公彝齋存稿序」(『道園類稿』巻18)。

(48) 鄭元佑「知秘書監鎮太史院司天臺事岳鉉第二行状」(『僑呉集』巻12)。

(49) 『元史』巻173「葉李列伝」4048頁。

(50) 『元史』巻203「方技列伝」4539頁。

(51) 『元史』巻135「曷剌列伝」3285-3286頁。

(52) 後述の蒙古軍主力部分を参照。

(53) 『元史』巻119「木華黎列伝附碩德列伝」2942頁。

(54) 『元史』巻124「忙哥撒兒列伝」3057頁。

(55) 『元史』巻149「移剌捏兒列伝附移剌元臣列伝」3531頁「帝親征乃顏、元臣率家僮五十人見行在所、願效前驅。」

(56) 黄溍「江浙行中書省平章政事贈太傅安慶武襄王神道碑」(『黄文獻集』巻10)。

(57) 胡祖廣「大元加封宏吉烈氏相哥八剌魯王元勳世德碑」(『鉅野縣志』巻20)。

(58) 黄溍「江浙行中書省平章政事贈太傅安慶武襄王神道碑」「既平乃顏、羣臣從屬車奏凱而歸、王復與諸將留兵討其餘黨金家奴、塔不觧、悉戡定之、乃還。」

(59) 『元史・特薛禪列伝』によれば「二十四年、從族父按答兒禿征叛王乃顏有功、亦賜號拔都兒。」とあり、按答兒禿とは帖木兒の別名である。『元史』巻118「特薛禪列伝」2918頁。

(60) 『元史・特薛禪列伝』に「其子曰不只兒、從征乃顏禽其黨金家奴、帝賞以金帶。」とあり、「安慶武襄王神道碑」にも「討其餘黨金家奴」とあることから、やはり帖木兒に属していたと考えるのが自然であろう。『元史』巻118「特薛禪列伝」2918頁。

(61) 『元史』巻133「孛蘭奚列伝」3235頁。

(62) 孛蘭奚に関して注目すべきは、「以齊王兵從」とあり、齊王家即ちジョチ・カサル家の兵を率いていたことである。当時ジョチ・カサル家の当主であった勢都兒はナヤン側の有力諸王であったが、孛蘭奚がジョチ・カサル家の兵を率い、且つ戦後にジョチ・カサル家の投下領であった信州のダルガチに任じられていることから、ジョチ・カサル家内に元朝側についた人物がいたことが窺われる。

(63) 『元史』巻169「賀仁傑列伝」3968頁。

(64) 渡辺健哉「元朝の大都留守について」(『文化』66、2002) 40-45頁。

(65) 『元史』巻90「百官志六」2297頁。

(66) 『元史』巻122「昔兒吉思列伝」3015頁。

(67) 閻復「太師廣平貞憲王碑」(『靜軒集』巻3)。

(68) 井戸一公「元朝侍衛新軍の成立」(『九州大学東洋史論集』第十号、1982) 52頁。

(69) 『元史』巻132「玉哇失列伝」3209頁。

(70) 『元史』巻135「口兒吉列伝附的迷的兒列伝」3278頁。

(71) 『元史』巻132「拔都兒列伝」3212頁。

(72) 『元史』巻131「伯帖木兒列伝」3195頁。

(73) 虞集「元故宣武將軍前衛親軍千戸皇公墓誌銘」(『常山貞石志』巻21)。

(74) 『元史』巻99「兵志二」2527頁。

(75) 大葉昇一「モンゴル帝国＝元朝の軍隊組織―特に指揮系統と編成方式について―」(『史学雑誌』95-7、1986) 9-12頁。

(76) 『元史』巻14「世祖本紀十一」296頁。

(77) 『元史』巻154「洪福源列伝附洪萬列伝」3633頁。

(78) 『元史・兀愛列伝』には「復從月魯兒那演討塔不歹、朶歡大王于蒙可山、那江、統兵五千餘衆、與八剌哈赤脱歡相拒、絶流戰黑龍江、箭中右臂、忍傷復戰、敵大敗。」とあり闍里帖木兒との関係は示されないが、洪萬の伝には「六月、至撒里禿魯之地、同都萬戸闍里鐵木兒、與乃顏將黄海戰、大敗之。」とあり、洪萬・兀愛の進軍ルートがほぼ同一、そしてその後カダアンの乱平定戦においても、同一地域に転戦していることから、兀愛も闍里鐵木兒の麾下にあったはずである。『元史』巻166「王綽列伝附兀愛列伝」3892頁。

(79) 『元史』巻154「鄭鼎列伝附鄭制宜列伝」3637頁。

(80) 海老沢哲雄「モンゴル=元時代の五投下について」(『東洋史学論集　山崎先生退官記念』山崎先生退官記念会、1967) 63-71頁。

(81) 姚燧「平章政事蒙古公神道碑」(『牧庵集』巻14)。

(82) 筆者修士論文『元代東北政治―以権力関係為中心―』89頁。

(83) 『元史』巻118「孛禿列伝附鎖兒哈列伝」2922頁。
(84) 『元史』巻120「朮赤台列伝」2963頁。
(85) 但し『元史・世祖本紀』に至元二十五年三月の記事として「敕遼陽省亦乞列思、吾魯兀、札剌兒探馬赤自懿州東征。」とあることから、ナヤンの乱平定後には、五投下のそれぞれの当主が別行動を取っていた可能性もある。『元史』巻15「世祖本紀十二」310頁。
(86) 『元史』巻162「李庭列伝」3797-3798頁。
(87) 『元史』巻15「世祖本紀十二」308頁。
(88) 『元史』巻162「李庭列伝」3797頁「塔不台、金家奴來拒戰、衆號十萬、帝親麾諸軍圍之、庭調阿速軍繼進、流矢中胸貫脅、裏創復戰、帝遣止之、乃已。」
(89) 『元史』巻162「李庭列伝」3797-3798頁「帝問庭：「彼今夜當何如？」庭奏：「必遁去。」乃引壯士十人、持火砲、夜入其陣、砲發、果自相殺、潰散。帝問何以知之、庭曰：「其兵雖多、而無紀律、見車駕駐此而不戰、必疑有大軍在後、是以知其將遁。」帝大喜、賜以金鞍良馬。」
(90) 呉澄「平章政事董忠宣公神道銘」(『呉文正公文集』巻32)「二十四年、世祖征乃顏。公聞有召命、先期率數騎詣軍。世祖大喜、謂公曰：「使汝父在、朕可不自至此。」軍中多夜驚、丞相伯顏奏用董士選宿衛。公領漢軍夜直、軍令肅然。世祖曰：「朕得安寢矣。」」。又、『元史』巻156「董文炳列伝附董士選列伝」3676頁「宗王乃顏叛、帝親征、召士選至行在所、與李勞山同將漢人諸軍以禦之。乃顏軍飛矢及乘輿前、士選等出步卒横擊之、其衆敗走。」
(91) 『元史』巻118「孛禿列伝附忽憐列伝」2922-2923頁。
(92) 『元史』巻135「失剌拔都兒列伝」3284頁。
(93) 『元史』巻133「塔出列伝」3223-3224頁。
(94) 虞集「姚忠肅公神道碑」(『山右石刻叢編』巻32)。
(85) 『元史』巻120「察罕列伝附亦力撒合列伝」2958頁。
(96) 程鉅夫「宜興守王君墓誌銘」(『雪樓集』巻21)。
(97) 党宝海『蒙元駅站交通研究』(崑崙出版社、2006) 286頁。
(98) 『元史』巻14「世祖本紀十一」299頁。
(99) 廉惇「平州路達魯花赤行省萬戸塔本世系狀」(『永樂大典』巻13993、引自『廉文靖公集』)
(100)『元史』巻14「世祖本紀十一」297-298頁。
(101)『元史』巻167「王國昌列伝附王通列伝」3927頁。
(102)『元史』巻129「來阿八赤列伝」3143頁。
(103) 張克敬「皇元故敦武校尉管軍上百戸張君墓碑銘」(『滿洲金石志』巻５)。
(104)『元史』巻129「來阿八赤列伝」に寄僧に関して「乃顏叛，戰于高麗雙城。」とあり「皇元故敦武校尉管軍上百戸張君墓碑銘」に「諸王乃顏叛。從千戸岳公，領軍屬以南，且戰且行。(中略) 如是遇敵相戰，踰四月，至高麗雙城。」とあり、千戸岳某らが阿八赤に属していたことは「張君墓碑銘」に明らかなことから、寄僧との間にも統属関係にあったことはほぼ間違いないだろう。
(105) 張克敬「皇元故敦武校尉管軍上百戸張君墓碑銘」。
(106) 閻復『靜軒集』巻3「樞密句容武毅王碑」。
(107)『元史』巻135「孛兒速列伝」3279頁。
(108)『元史』巻135「乞台列伝」3286頁。
(109) 蕭啓慶「元代的鎮戍制度」『元代史新探』116-122頁。
(110) 愛宕松男訳注『東方見聞録1』180頁。
(111) 筆者修士論文『元代東北政治—以権力関係為中心—』97-99頁。

ナヤンの乱平定戦に於ける元朝軍の編成（統属関係表）

凡例：インデントは統属関係を表す。右にあるものほど関係上下位のものである。
人名の後の各情報はそれぞれ出自／職掌／出典を表す。
人名の下に＿を加えたものについては、史料上直接確認は出来ないが、各状況から統属関係上その位置にいたと推測可能なものである。

一、主力軍

1.クビライカーン

・クビライ・ケシク

2.脱脱　ジャライル国王家／世祖怯薛／『元史』巻119「木華黎列伝附脱脱列伝」

3.昂阿禿　唐兀／速古兒赤／『元史』巻123「也蒲甘卜列伝」

4.賀勝　漢族京兆、賀仁傑之子／怯薛某職／『道園類稿』巻46「賀忠貞公墓誌銘」等

5.王伯勝　漢族霸州／世祖怯薛／『元史』巻169「王伯勝列伝」

6.阿沙不花　康里／以千戸帥昔寶赤之衆／『元史』巻136「阿沙不花列伝」

7.塔海　合魯／哈剌赤／『元史』巻122「鐵邁赤列伝附塔海列伝」※皇孫テムル、土土哈何れかの部隊に所属の可能性あり。

8.皇孫テムル　クビライの孫、チンキムの子／皇孫／『元史』巻135「忽林失列伝」

・テムル側近

9.王慶端　漢族真定／詹事丞／『雪樓集』巻17「冀國王忠穆公墓碑」等

10.月魯哥　高昌／裕宗、成宗怯薛？／『道園類稿』巻41「高昌王神道碑」

11.買住　不明／元裕宗怯薛？／『柳待制文集』巻8「買住謚文簡」

12.忽林失　八魯剌觧／八魯剌思千戸／『元史』巻135「忽林失列伝」

・枢密院諸臣

13.伯顔　蒙古八鄰／同知樞密院／『清河集』巻3「丞相淮安忠武王碑」等

14.洪君祥　高麗／同僉樞密院事／『元史』巻154「洪福源列伝附洪君祥列伝」

15.暗伯　唐兀／前權樞密院客省使／『元史』巻133「暗伯列伝」

16.郭明德　漢族真定／前衛史／『滋溪文稿』巻11「同僉樞密院事郭敬簡侯神道碑銘」

・中央官員、幕僚など

17.洪俊奇　高麗／前征東行省右丞／『元史』巻154「洪福源列伝附洪茶丘列伝」

18.碩德　ジャライル国王家／同知通政院事／『元史』巻119「木華黎列伝附碩德列伝」※博魯歡の五投下軍に配置された可能性もある。

19.曷剌　兀速兒吉／太官直／『元史』巻135「曷剌列伝」

20.鐵哥　迦葉彌兒／大司農／『元史』巻125「鐵哥列伝」

21.明禮帖木兒　察哈札剌兒、忙哥撒兒之孫／翰林學士承旨／『元史』巻124「忙哥撒兒列伝」

22.焦養直　漢族東昌／典瑞少監／『道園類稿』巻18「焦文靖公彝齋存稿序」等

23.岳鉉　漢族燕京／司天台提點／『僑呉集』巻12「知秘書監鎮太史院司天臺事岳鉉第二行状」

24.靳德進　漢族大名／掌司天事／『元史』巻203「方技列伝」

25.移剌元臣　契丹／無（率家僮五十人）／『元史』巻149「移剌捏兒列伝附移剌元臣列伝」

26.葉李　漢族杭州／尚書左丞／『元史』巻173「葉李列伝」等

・コンギラト投下軍

27.帖木兒　弘吉剌、特薛禪之孫／尚書平章政事、萬戸／『黄文獻集』巻10「江浙行中書省平章政事贈太傅

安慶武襄王神道碑」等

28.脱憐　弘吉剌、按陳の裔孫／弘吉剌部千戸／『元史』巻118「特薛禪列伝」

29.不只兒　弘吉剌、特薛禪の裔孫／不明／『元史』巻118「特薛禪列伝」

30.孛蘭奚　雍吉烈／齊王司馬／『元史』巻133「孛蘭奚列伝」

・上都駐留諸軍

31.賀仁傑　漢族京兆／上都留守兼本路總管開平府尹／『元史』巻169「賀仁傑列伝」

32.千家奴　蒙古某氏、撒里蠻の兄／不明／『元史』巻122「昔兒吉思列伝」

33.撒里蠻　蒙古某氏，千家奴の弟／僉宣徽院事、上都迭只斡耳朶千戸／『元史』巻122「昔兒吉思列伝」

・蒙古軍主力

34.玉昔帖木兒　阿兒剌、博爾朮後裔／御史大夫／『靜軒集』巻3「太師廣平貞憲王碑」等

35.玉哇失　阿速／前衛親軍都指揮使／『元史』巻132「玉哇失列伝」

36.的迷的兒　阿速／百戸／『元史』巻135「口兒吉列伝附的迷的兒列伝」

37.皇餘澤　漢族真定／前衛侍衛親軍千戸／『常山貞石志』巻21「元故宣武將軍前衛親軍千戸皇公墓誌銘」※或いは玉哇失の指揮下か？

38.伯帖木兒　欽察／僉左衛親軍都指揮使司事／『元史』巻131「伯帖木兒列伝」

39.拔都兒　阿速／後衛親軍副都指揮使／『元史』巻132「拔都兒列伝」

40.鄭制宜　漢族澤州／平陽太原兩路萬戸／『元史』巻154「鄭鼎列伝附鄭制宜列伝」

41.道家奴　蒙古／御位下必闍赤／『金華黄先生文集』巻37「真定路總管府達魯花赤致仕道家奴公墓誌銘」

42.闍里帖木兒　不明／蒙古都萬戸府萬戸／『元史』巻12「世祖本紀九」等

43.洪萬　高麗／高麗軍民總管／『元史』巻154「洪福源列伝附洪萬列伝」

44.兀愛　高麗／高麗軍民總管、東征左副都元帥／『元史』巻166「王?列伝附兀愛列伝」

・五投下軍

45.博魯歡　忙兀／行台御史大夫／『呉文正公文集』巻33「江南諸道行御史臺大夫魯國元獻公神道碑」等

46.月列台　亦乞列思／イキレス部当主／『元史』巻118「孛禿列伝附鎖兒哈列伝」

47.脱歡　兀魯兀台／不明／『元史』巻120「朮赤台列伝」

48.慶童　兀魯兀台、脱歡の弟／不明／『元史』巻120「朮赤台列伝」

・漢人諸衛軍

49.李庭　女真蒲察／前中書左丞、司農卿／『元史』巻162「李庭列伝」

50.董士選　漢族真定／前同僉行樞密院事／『呉文正公文集』巻32「平章政事董忠宣公神道銘」等

・別動部隊及び所属不明

51.薛闍干　黨項、河西国王、重慶郡王／中書平章政事／『元史』巻118「孛禿列伝附忽憐列伝」

52.忽憐　亦乞列思、月列台の弟／不明／『元史』巻118「孛禿列伝附忽憐列伝」

53.和元魯　諸王／不明／『元史』巻135「失剌拔都兒列伝」

54.失剌拔都兒　阿速／尚乘寺少卿、管阿速軍千戸／『元史』巻135「失剌拔都兒列伝」

二、遼東・遼西方面軍

・皇子愛牙赤軍

55.愛牙赤　世祖皇帝第六子／不明／『元史』巻14「世祖本紀十一」

56.脱脱台　不明／監司／『元史』巻133「塔出列伝」

57.漢爪　不明／僉院／『元史』巻133「塔出列伝」

・遼東宣慰司軍

58.塔出　札剌亦兒／遼東道宣慰使／『元史』巻133「塔出列伝」

59.阿老瓦丁　ジャライル国王家、相威或いは撒蠻の子／遼東道宣慰使／『山右石刻叢編』巻32虞集「姚忠

肅公神道碑」

・北京宣慰司軍

60.亦力撒合　黨項／北京宣慰使／『元史』巻120「察罕列伝附亦力撒合列伝」等

61.王德亮　漢族范陽／北京宣慰司都事／『雪樓集』巻21「宜興守王君墓誌銘」

三、永平路駐屯軍

62.范文虎　南宋旧臣／尚書右丞、商議樞密院事／『元史』巻14「世祖本紀十一」

63.也速帯兒　康里／欽察衛親軍都指揮使／『元史』巻123「艾貌列伝附也速台兒列伝」等

64.王通　漢族、左武衛親軍千戸王國昌之子？／僉左衛親軍都指揮使／『元史』巻167「王國昌列伝附王通列伝」等

四、水達達路方面軍

65.寄僧　黨項／水達達屯田總管府達魯花赤／『元史』巻129「來阿八赤列伝」

66.岳某　不明／千戸／『滿洲金石志』巻5張克敬「皇元故敦武校尉管軍上百戸張君墓碑銘」

67.張成　漢族蘄州／百戸／『滿洲金石志』巻5張克敬「皇元故敦武校尉管軍上百戸張君墓碑銘」

五、カラコルム方面軍

68.土土哈　欽察／樞密院副使兼欽察親軍衛都指揮使／『靜軒集』巻3「樞密句容武毅王碑」等

69.答答呵兒　脱脱忒／揭只揭烈温千戸所達魯花赤／『元史』巻135「孛兒速列伝」

70.乞台　察台／欽察衛百戸／『元史』巻135「乞台列伝」